

寒川鼠骨編「模範滑稽俳句評釈」を読む（二）

八塚一青

それでは「模範滑稽俳句評釈」を見ていきましょう。全二百九十ページあり、春・夏・秋・冬と四部に分かれています。古くは俳諧の祖と呼ばれる荒木田守武から同時代を生きた内藤鳴雪の句まで様々な俳諧師、俳人の句が取られています。その中で圧倒的に多く取られている俳人がふたり。小林一茶と与謝蕪村です。ふたりは鼠骨の師である子規がそれぞれ俳論で取り上げているように子規一派にとって特別な存在でした。とりわけ蕪村への傾倒は深く、今日、蕪村が有名なのは子規門の功績と言ってよいでしょう。ふたりの句はたくさん引かれています。その中より各一句、私が気になった句をご紹介します。

明月のご覧の通り屑家かな 一茶

貧乏に追付かれけり今朝の秋 蕪村

一茶句について、鼠骨は以下のような評釈をつけています。「貧しき侘しき家を苦とせず貧に安んじて居る以上に、貧も富も関する所にあらずとして超越している心持ちが十分に現れている。」そして蕪村句には「貧乏に追付かれたといふのは普通世間でいふ言葉で格別珍しくもない。けれども下五へ今朝の秋と置いたので滑稽千万なものとなった。」いずれもボロは着てても心は錦といった、貧しいけれども心は豊かな句と言えます。ふたつの句に共通しているのは「明るさ」です。とりわけ一茶句にいたっては明月を最初に置くことで句全体が光って見えるほどです。鼠骨が言うところの「超越している心持ち」というのはある種の開き直りではありますが、その心持ちが光源となり、鑑賞者を明るい気持ちにさせます。この「明るさ」の伝播こそ、滑稽俳句の真骨頂ではないでしょうか。さらに引きます。

角落ちて鹿出家せりと思ふらん 紅緑

しやアとして年貢も出さぬ蛙哉 紅緑

鼠骨より早くに「滑稽俳句集」を編んだ同門の佐藤紅緑の句もいくつか引かれ

ています。紅緑と鼠骨にどれだけの交流があったか書かれたものは少ないのですが、子規門で特に「滑稽」を愛するふたり。お互いシンパシーは感じていたかもしれませんが。鹿の句で鼠骨は以下のように評しています。「あり得べからざるを、有るかの如くに言ふた所が、飛び離れた俳的の構想であって、いわゆる奇想天外というべきである。」

ここでいわれている「俳的の構想」という言葉が面白いです。先に「明るさ」が滑稽俳句の真骨頂と書きました。しかし、ただ明るければよいかといえば、そうでもありません。

**首なくて涼しかるらん石地藏                      紅緑**

辻に立つ首の無いお地藏さま。年を経て朽ちてしまったのでしょうか。ここに日本古来から存在する美意識のひとつである「風情」があります。風情とは長い時間を経て自然によりもたらされる物体の劣化と辞書にあるように、儂いものの中にある美しさ、情趣のことです。私は、最良の滑稽俳句は、「明るさ×風情」の融合だと思っています。

風情を描く時、そこに余情、余韻が残ります。最高の名人の落語を聞いた後に残る、あの感覚。私が理想とする「滑稽俳句」がそこにあります。次回はいよいよ、俳聖と呼ばれた芭蕉と子規の滑稽感を探ります。